

旧約聖書を読んで感じること(31) 申命記(5)「モーセの歌と祝福」

モーセは、エジプトの追手が葦の海で沈んで、民が無事に逃げ切ることが出来たのを、喜び祝って、民と共に、「海の歌」を歌っています。(出 15:1)



Alfred Gatley (1816-1863)

主に向かってわたしは歌おう。
主は大いなる威光を現し
馬と乗り手を海に投げ込まれた。
主はわたしの力、わたしの歌
主はわたしの救いとなってくださった。
この方こそわたしの神。わたしは彼をたたえる。
わたしの父の神、わたしは彼をあがめる。
主よ、あなたの右の手は力によって輝く。
主よ、あなたの右の手は敵を打ち砕く。

モーセは死ぬ日が近づいた時、ヨルダン川の東に建てた幕屋の中で、最後に歌(申 32:1-42)を書き記しました。モーセは、荒野の民にとって命を守る水を、さまざまにイメージして歌い始めました。密やかな露や、穏やかで静かな雨がどれだけ民を守ったことでしょうか。そして、歌は寄せては返す波のように、民に幾度となく呼びかける神、それにもかかわらず、神を忘れる民の姿を交互に描いています。



神の言葉は、**雨、露、小雨、夕立**のように降り注ぐ (1-6a)

民は不正を好み、神を離れ、愚かで知恵がない



神は**造り主なる父**であり、**一つの民として立てられた** (6b-7)

民は昔の日々を、父に、長老に尋ね、恵みを思いかえせ



神は**荒野で民を見出し、守られ、育てられた** (8-18)

民は、大きくなると頑なになり、神ならぬ悪霊に心を寄せる



神は**憤り、顔を隠し、民に災いを下す** (19-27)

民は飢え、衰え、病に弱り、恐れる



神は**災いを神の知恵を悟らせるために与えた** (28-35)

民よ、思慮深く、洞察せよ、誰が、どこで、神であったかを



神は**民を裁き、また、民を苦しめる者を報復する** (36-42)

「海の歌」や、この辞世の「モーセの歌」は、水につながりがあります。モーセの不思議な運命、ナイル川に捨てられ、ナイル川で拾われ、それにより命名された遠い昔のことを思い出させます。

王女は彼をモーセと名付けて言った。「**水の中からわたしが引き上げた(マーシャー)のですから。**」(出 2:10)

モーセは最後に 12 部族それぞれに祝福の言葉を与えました。モーセの死後、民が再び主に背き、墮落するだろう、神が顔をそむけるだろうと知っていても、民を愛して、すべての部族に優しいあたたかい励ましを与えています。ところが、シメオン族の名前が記されていません。民数記の第 2 回目の人口調査では、シメオン族の数は三分の一ほどに減っています。モーセにとってもシメオン族の不信仰は心の傷として残っていたのでしょう。モーセは民の不信仰の故に、約束の地に入ることが許されませんでした。モーセはその傷を自分自身の傷として背負ったのです。そして、消えていくことを受け入れました。